

東北六県連（青森・秋田・山形・岩手・宮城・福島）

## 仙台で「東北絆まつり」開催 力強い復興をアピール

東北六県商工会議所連合会や東北6市などで構成する東北絆まつり実行委員会は、6月10、11日の2日間、宮城県仙台市内で、「東北絆まつり2017仙台」を開催した。同祭りは、東北6市の祭りが一堂に集結し、震災からのさらなる復興に向けて歩んでいく東北の姿を国内外に広くアピールするもの。復興の旗印として昨年まで開催されていた「東北六魂祭」の後継イベントとして装いも新たにスタートし、2日間で合計45万人を超える観客を動員した。



▲10日に実施した一番町商店街流し踊り。総勢約120人が華やかな踊りを見せた

北が、熱い絆でひとつになる。東北の財産である各地に根差した文化を将来に引き継ぎ、さらなる復興に向け絆を深めるといふ思いが込められている。10日の開祭式では、鎌田宏実行委員長（仙台六会頭）が、「復興に向け力強く歩む東北の力を感じていただき、8月にはぜひ、各市の本祭りに足を運んでいただきたい」とあいさつした。

東北絆まつりには、東北六市を代表する「青森ねぶた祭り」「秋田竿燈（かんとう）まつり」「盛岡さんさ踊り」「山形花笠まつり」「仙台七夕まつり」「福島わらじまつり」が参加。11日に実施したパレードには「仙台青葉まつり」のすずめ踊りも特別参加し、それぞれの祭りの踊り手など約1200人が約1.1kmのコースを約2時間半かけて往復した。沿道に詰め掛けた観

客からは、東北の力強い復興を表す各祭りの演技に大きな歓声が上がった。また、ステージイベントや

御坊（和歌山県）

## 「幸せくるる（くれる）」菓子開発 まちの歴史や文化をモチーフに

御坊商工会議所（和歌山県）は5月15日、新しい御坊土産として菓子5種類を発表した。これは、御坊市の地方創生に向けた取り組み「わがまち魅力発信事業」の一環として、市から委託された同所が御坊菓子工業組合に依頼し開発されたもの。菓子を通じて御坊の魅力のアピールしようと、同組合加盟の5店が「幸せくるる」をテーマに御坊の歴史や文化をモチーフ



▲新しい御坊土産となった五つの菓子。パッケージデザインはそろえた

「ねぶた祭り」の山車の展示、東北グルメを楽しむ飲食ブースの出店もあり、祭りにはぎわいを見せた。

にした菓子を考案した。「くるる」は、「くれる」を意味する同地方の方言。菓子には学力や健康、美金運、結び（人の縁）など「五望」（五つの望み）をかなえるという願いも込められている。

5種類の菓子は、学問の神「天神人形」の形のゴボウあん入りまんじゅう「紀州御坊の天神さん」、名所・本願寺日高別院のイチヨウの焼き印を入れたどら焼き「お美堂さん」、日高別院太鼓楼をモチーフにしたクッキー「太鼓楼」、御坊に伝わる「宮子姫物語」にちなんだまんじゅう「宮子」、昭和39年の東京オリンピック招致に尽力し日米友好の懸け橋となった偉人・和田勇をイメージした金山寺みそ入りのパイ菓子「夢くるる」。それぞれ各店で販売されている。また、店舗の場所と観光名所を記したマップも作成、各店と一部観光施設で配布している。

豊田（愛知県）

## 特産品紹介サイト「とよたマルシェ」開設 小規模事業者の販路拡大へ

豊田商工会議所は5月26日、豊田市らしさのある加工食品を紹介するウェブサイトを「WE LOVE」とよたマルシェ」をオープンした。「クルマのまち」のイメージが強い同市だが、「おいしい特産品」も多数あることをアピールするのが狙いだ。市内の小規模事業者が自ら製造・販売している菓子や地酒など地域性のある加工食品を同サイトで紹介し、販路拡大や集客を支援する。



▲http://toyota-marche.jp/（トップページ）



▲「WE LOVE とよたマルシェ」のロゴ

同所は2月に出店者を募集。今回、31事業所が出店した。掲載商品は、自動車をかたどったものもなかやオレンジ色のトマト・桃太郎ゴールド100%のトマトジュース、会

社の庭先で養蜂を始めたデザイン事務所がつくる天然ハチミツ、豊田産のコメ、イノシシと鹿肉のジビエ焼き肉セットなどバラエティー豊か。商品だけでなく店舗情報や商品へのこだわり、生産者や販売者の想いなども紹介されている。7月3日から2回目の出店者募集も開始（同月末日まで）。10月1日から同サイトに加える予定だ。出店に際しては説明会を実施し、自社で商品撮影が難しい事業者へはプロのカメラマンを手配するなど、サポートも行っている。「大手通販サイトでは埋もれがちな小規模事業者が安心して利用でき、売り上げ増につながるサイトにした。い。今後はサイトの広報活動に力を入れていく」と同所は話している。

いちき串木野（鹿児島県）

## 空き店舗を再生、活用 留学生らの居住の場に

いちき串木野商工会議所といちき串木野市、学校法人神村学園の3者は4月16日、市内の空き店舗を活用した外国人向けシェアハウス「KACCHEL（かつちえる）」をオープンした。「かつちえる」とは、鹿児島方言で「仲間に入れる」を意味する。

3者は昨年、産学官連携により、商店街の空き店舗を東南アジアなどからの留学生や企業研修生の居住の場として再生・活用する「KACCHELプロジェクト」を立ち上げた。施設は鉄筋コンクリート4階建てで部屋数20部屋（定員20人）。2階には交流スペースとして「KACCHELサロン」を設けた。オープン後、早速台湾からの留学生やワーキングホリデーで訪れる学生の入居が決まったという。同施設は今後、留学生だけでなく人手不足に悩む製造業の労働力となる外国人の居住の場としても活用されることとなる。



▲テープカットを行う濱田雄一郎会頭（右から4人目）、田畑誠一市長（左から4人目）、神村学園の常田恭一事務局長（右から3人目）ら



▲KACCHELの外観